後期江戸語敬語体系における〈あなた・おまへさん〉

小島俊夫

一　目標・方法・資料

本稿の目標は、後期江戸語〈あなた・おまへさん〉の帯びる敬意に差異と変遷とが存するか否かについて、敬語体系と〈敬語行動の場〉との視点から、考究することにある。

本稿において後期江戸語敬語体系と称するのは、十九世紀に刊行された滑稽本・人情本を資料とする後期江戸語について、対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式が、段階A（下位の話し手から上位の話し相手への関係）・段階B（対等の関係）・段階C（上位の話し手から下位の話し相手への関係）・段階D（ののしりの表現）に区分され、さらに、段階Bが段階B_1と段階B_2、段階Cが段階C_1と段階C_2に区分されたものである。それは、敬語体系の部分（辞項 terms）が必ず敬語体系全体におけるその位置を指摘され、敬語体系全体のなかでの役割が記述されるように試みられる。[1]

〈あなた・おまへさん〉は、敬語体系のなかで、段階Aに位置づけられ、その〈敬意の内容〉は、上位の話し相手に対する下位の話し手の最上級の敬意。対等に相互に対話する場合には、最上級の社交や教養を反映する。

小松寿雄氏は、一九九六年一〇月、論文「江戸東京語のアナタとオマエサン」（『国語と国文学』73巻10号）のなかで、「細かく見るとアナタの方が、オマエサン系（オマエサン・オメエサン）より待遇価値が若干高い」・「文化・文政期から天保期を経て東京語へと変遷する途上で、アナタが上流階層に広く用いられるようになる」との見解を述べている。氏の方法は、その論文のなかに「町人は目上の聞き手を、武家であればアナタで、町人であればオマエサンで言い表す傾向があった。」・「アナタの用例が一四〇を超えるのに、一方オマエサン・オメエサンは八〇例に届かない。」などとあることから、話し手・話し相手の身分・階層の差、語の用いられる度数の差を拠り所としていることがわかる。

これに対し、小島俊夫の方法は、次のとおりである。①〈あなた・おまへさん〉は、敬語体系全体のなかに、位置づけられ、②それらの構成する主述呼応の諸形式のひとつとして、把握され、③言語行動の〈場〉[2]（話し手が、話し相手に対して、或る

ことがらについて、或る関係のもとに、語りかけること）の吟味を経て、論じられる。〈あなた〉や〈おまへさん〉が、単独で、扱われることはない。〈あなた〉や〈おまへさん〉の用いられる度数の多少が扱われることは、まれである。

方法について、小林英夫氏は、次のように、述べている。事実そのものを科学的事実へと鑄なおす手続きとしての方法は、研究者の研究目的のうちにあり、研究対象の正しい見きわめによって、決まる。あたらしい方法があたらしい体系を樹立し、方法に対する批判を経て、体系が認承される。(3)

後期江戸語敬語体系の図式化——対称代名詞の構成する主述呼応の諸形式

段階	敬意の内容	主語 対称代名詞
段階A	上位の話し相手に対する話し手の最上級の敬意。相手に対する下位の話し手の、礼をとも基本的に反映する。	あなた あなたさま おまへさん おまへさま おめへさん おめへさま 貴殿〔武士〕
段階B_1	話し相手に失しない範囲での、くつろいだ敬意。	おまへ おめへ 貴殿〔武士〕 貴所〔武士〕 貴公〔武士〕
段階B_2	対等な人間関係を、もっぱら対等に相互に対して使用。	おまへ おめへ 貴様 貴公〔男〕 ぬし
段階C_1	上位の話し手が下位の話し相手に対して、故意に敬意を反映する。	てめへ （てまへ〔女〕） おのし こなた 貴様
段階C_2	上位の話し手が下位の話し相手に相互に、親愛感のもとに対話する。	おまへ おめへ 貴様
段階D	のしりことば。対等の場合が、粗野で隔意なき感情の交流として、下層階級に多く見られる。	うぬ われ おのれ てめへ （貴様）

述語		
命令表現	（例）言ふ	（例）待つ
お待ちなさいまし。 お待ちあそばせ。 おつしやつてください まし。	おほせられます。 おつしやいます。	お待ちなさいます。 （お待ちになります。） お待ちあそばします。
待ちなされ。 お待ちなさい。 お待ちな。 〔女〕	言ひなさる。 おつしやる。 お言ひだ。	（お）待ちなさる。 お待ちだ。 （女）
待ちな。 待ちなせへ。 待ちねへ。 待たつし。	言ふ。	待つ。
待て。 待つたりよ。 待つた。	言ふ。	待つ。
待ちなされ。 お待ちなさい。 待たつしやい。 待たつせへ。 待ちやれ。 お待ちな。 〔女〕	言ひなさる。 おつしやる。 お言ひだ。	（お）待ちなさる。 お待ちだ。 （女）
待ちやがれ。 待て。 ぬかせ。ほざけ。 ぬかしやがれ。 ほざきやがれ。 言へ。	ぬかす。ほざく ぬかしやがる。 ほざきやがる。 言つてけつかる。	待ちやがる。 待ちをる。 待つてけつかる。

図表に示されていない辞項、たとえば、〈御自分様〉（いろは文庫・第四十六回）・〈みども〉（七偏人・二編中）・〈モシ・コレ・コウ〉（浮世風呂・四編下）その他については、右に掲げた図表の主述呼応の形式に当てはめて、位置づけられるべきである。

本稿の資料は、左のとおりである。

一八〇六 文化三 戯場粋言幕の外（新日本古典文学大系・岩波書店）
一八〇九 文化六 浮世風呂（同）
刊年未詳 春秋二季種（帝国文庫・博文館）

一八三二 天保三　恋の花染（人情本全集・同刊行会）
一八三六 天保七　いろは文庫（有朋堂文庫・有朋堂）
一八四三 天保一四　夢酔独言（東洋文庫・平凡社）

さきに掲げた〈後期江戸語敬語体系の図式〉ならびに〈本稿の内容〉を支える資料については、『後期江戸ことばの敬語体系』（一九七四）を参照せられたい。

二　敬語体系、その抽象性

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、次のように、述べている。

> アナタとオマエサンは、前に述べたように、後期江戸語において最高段階の対称（ママ）であった。両者の待遇価値が同じであるということについては、すでに小島俊夫氏が指摘されている。しかし、細かく見るとアナタの方が、オマエサン系（オマエサン・オメエサン）より待遇価値が若干高い。

右の論述によれば、小島俊夫は、あたかも両者の〈敬意の度合〉が同じである側面のみを主張し、両者の〈敬意の度合〉に差異のある側面に触れていないように、受け取られる。

だが、実際には、小島俊夫は、〈あなた〉と〈おまへさん〉の〈敬意の度合〉に差異のある側面について、次のように、述べている。[4]

> 「あなたさま・あなた・お前さま・お前さん」などの類義語をあつめて、それらが相互に影響し、関連しあう範囲をあきらかにし、すべての語を体系づけ、全体のなかに位置づけようとする際に、留意すべき点は、語の意味の中心的（典型的）な部分と周辺的（付加的）な部分とを識別して、混同しないことであろう。（『後期江戸ことばの敬語体系』・一九七四・第二章第一節）

「あなたさま・あなた・おまへさま・おまへさん」は、町人を話し手とし、武士を話し相手としている点で、［小島注、この範囲では］共通しており、これらの類義語は、それぞれ、多少、意味（敬意）をことにしながら、ひとしく段階Aに所属すべき語とみとめられる。（同）

滑稽本や人情本において、段階Aに所属する対称代名詞として、もっともひろくもちいられた語は、「あなた・おまへさん」であり、さらにたかい敬意をあらわす語として、もちいられることのまれな語が「あなたさま・おまへさま」であり、逆に「おめへさん」は、「あなた・おまへさん」よりも、ややぞんざいなひびきを有していたものとみとめられる。「おめさん」にいたっては、段階Aに相当する語とはいえ、滑稽本や人情本の後期江戸市民社会で、ひろく一般的にもちいられていたとは、かんがえられない。（同）

対称代名詞群は、同一の言語共時態下に、異なる語でありながら、個々の文脈において、互いにほぼ同じ意味（話し相手を指し示すこと）に用いられ、類義語の関係にある。

小松寿雄氏は、「細かく見ると」両者の待遇価値に差異がある、という。では、両者の待遇価値が同じであるというのは、どのような観点に立つのだろうか。氏は、同じ論文のなかで、「アナタとオマエサン系の待遇価値がだいたい同程度であるということは、両者がしばしば同じ聞き手に対して用いられることに、よく現れている。」と述べている。「だいたい同程度」・「しばしば……用いられること」という〈論の進め方〉に、小島俊夫は、賛意を表しがたい。

では、小島俊夫が、〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめへさま・おめさん〉について、〈敬意の度合〉が同じである側面を持ち、同時に、〈敬意の度合〉に差異がある側面をも有すると考えるのは、どのような観点に立つのだろうか。

この観点について考えを述べるにさき立って、言語研究にとって言語体系という考え方がどのようなものか、確認しておきたい。

東京方言〈岡氏・お菓子・お貸し〉のアクセントは、各語が、各個に、多様な型を示す。それらは、次のとおりである。

aオカシ（岡氏）

	シ	シ	シ	
カ	カ	カ		カ
オ	オ	オ	オ	
1	2	3		

オがカよりも高くありさえすればよい。

シの高さは、自由。（ただし、東京方言アクセントに、カが低く、しかもオとシが同じ高さの型は、存在しない。）

bオカシ（お菓子）

シ	シ	シ	
カ	カ	カ	
オ	オ	オ	オ
1	2	3	

カがシよりも高いことが第一条件。カがオよりも低くないことが第二の条件。（第二の条件は、必ずしも必要でない。）

cオカシ（お貸し）

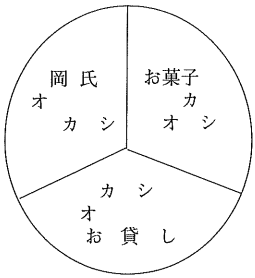
シ	シ	シ	シ	
カ	カ	カ	カ	
オ	オ	オ	オ	
1	2	3	4	

シがカよりも低くなく、カがオよりも低くないことが必要。（シがカよりも高いことやカがオと平らなことは、支障がない。）

東京方言共同体の成員たちは、会話に当たり、話し相手に対して、aの1・2・3、bの1・2・3、cの1・2・3・4のなかから、各項のひとつを選んで話す。選ばれた〈型〉によって、話し手は、話し相手に対し、それぞれ、特有の〈感情〉[5]を、喚起させる。

しかし、右のような多種多様な型の〈集まり〉のままでは、東京方言のアクセント体系が把握されることは、無い。オカシ（岡氏）・オカシ（お菓子）・オカシ（お貸し）が、東京方言ア

クセント体系（の一部分）として、捉えられるためには、ふたつの観点に立つ必要がある。その最初の観点は、「語の高い〈（音韻論的）音節〉から低い〈（音韻論的）音節〉へと最初に下がる部分は、どこか？」と、問うところにある。



オからカへと（最初に）下がる型が〈岡氏〉、カからシへと（最初に）下がる型が〈お菓子〉、語のどこにも下がる部分の無い型が〈お貸し〉となる。くわえて、「語の最初の〈（音韻論的）音節〉と二番めのそれとがいつも高さの異なる、高低二段の型と考えることとする。」という〈仮設の条件〉を設定すると、aの2・bの2・cの2だけが残り、アクセント体系のなかに位置づけられる。[6] 東京方言アクセント体系の確立によって、京阪方言アクセント体系との間にどのような関係があるかが分かる。[7]

小島俊夫が、〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめへさま・おめさん〉の〈敬意の度合〉を同じと認め、後期江戸語敬語体系の段階Aに位置づけるのは、まさしく、オカシ（お菓子）を東京方言アクセント体系の中高型と位置づけ、bの1と3を捨象するのと同じ考え方である。同時に、小島俊夫が、これらの対称代名詞群の〈敬意の度合〉に差異を見いだすのは、まさしく、オカシ（お菓子）をbの1・2・3の〈集まり〉として把握し、それぞれの〈型〉に托される〈（話し手の）感情〉を聴きわけるのと同じ取り組み方である。

東京方言アクセント体系の一範疇としての〈中高型〉と（さきに示した）bの1・2・3の各〈型〉の関係、後期江戸語敬語体系の一範疇としての〈段階A〉の敬意の内容と〈段階A〉に所属する個々の対称代名詞の敬意の度合の関係を解き明かすものとして、服部四郎氏は、次のように、述べている。

> 要は、抽象的言語単位が仮定であることを十分認識して居ればよいのであって、常に具体的事実の観察と把握に努力しながら、抽象的言語単位によって言語学的考察を進めることは、決して不当でない。[8]

十八世紀後半の京都方言としての『古今集遠鏡』・『古今和歌集ひなことば』の口語訳において、前者は、もっぱら〈あなた・あなたさま〉（段階A）が用いられ、〈お前さん・お前さま〉（段階A）は一例も見いだされない。これに対し、後者は、〈あなた・あなたさま〉が用いられるばかりでなく、ただ一例ながら、〈お前さま〉が用いられている。とは言え、〈お前さま〉を用いる・用いないという敬語行動の差異は、敬語表現における個人的側面に過ぎず、その社会的側面たる敬語体系としての〈お前さま〉は、十八世紀後半の京阪語共同体の成員の脳裡に、厳として存在していた。つまり、『古今集遠鏡』の著者は、〈お前さま・お前さん〉という語を聞いて、敬語体系のなかでの〈語の位置〉を理解でき、その気になれば、それを使用できた、と

考えられる。[9] この推測を可能にする根拠は、言語体系の抽象性・整合性・社会性にある。

言語行動の〈場〉において、言語が機能する際に、言語体系は、一般人には見えない言語様相を、言語研究者には、見せてくれる。

要するに、後期江戸語〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめへさま・おめさん（など）〉には、〈敬意の度合〉が同じである側面があり、それと同時に〈敬意の度合〉に差異を持つ側面がある。ふたつの側面の、前者は、後期江戸語敬語体系に占める一範疇〈段階A〉に位置づけられた〈敬意の内容〉であり、抽象性が高い。後者は、後期江戸語の対称代名詞群を〈その意味が相互に影響し、関連し合う関係〉として捉えた際の〈敬意の度合〉であり、そこに〈敬意の度合〉の個別性（喚起される〈感情〉の差異）が内包される。

三　〈敬意の度合〉の個別性

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、

> オマエサンについては、小島俊夫氏の『後期江戸ことばの敬語体系』（笠間書院）があるが、これも江戸語におけるオマエサンとアナタの交替をめぐる両者の関係などに触れたものではない。

と述べ、〈おまへさん〉と〈あなた〉の交替をめぐる両者の関係について、文化・文政期（『浮世風呂』・『浮世床』）・天保期（『春色梅児誉美』・『花筐』・『仮名文章娘節用』）を経て東京語へと変遷する経緯を、両語を用いる人々の身分・階層の差異、語の用いられる度数の差に拠って、考究している。

これに対し、小島俊夫は、後期江戸語〈あなた・おまへさん〉を、ひとつの言語共時態のなかの敬語体系における〈敬意の流動〉・〈敬語の変遷〉・〈ゆれ〉として、とらえ、

> 〈敬意の反映〉は、階層・職業・年齢・性別・気質・雰囲気などによる制約のもとに、かぎりなく流動し、敬と侮、親と疎のあいだを連続的にゆれうごく。それにくわえて、言語の変遷が、個々の語のうえに、めだたず、徐々に、しかも、たえまなく進行する。敬語体系内部に若干の〈ゆれ〉の生じる事情が、これらの点から、かんがえられる。（『後期江戸ことばの敬語体系』第二章第二節）

と述べている。

言語学上の共時態について、ソシュールは、

> 実践上では、言語状態というものは、一点ではなくて、そのあいだに生じた変更の総和が極少である、多少とも長さのある時間間隔である。それは十年でもよし、一世代でも、一世紀でも、さらにそれ以上でもかまわない。[10]

と、述べている。個々の語のうえに、めだたず、徐々に、しか

も、たえまなく進行する〈後期江戸語の変遷〉は、変更の総和が極少である、多少とも長さのある時間間隔としての、ひとつの言語共時態のなかでの〈変容〉にとどまる、と考えられる。既成の敬語体系が（部分的に）崩壊し、同じ観点に立つ別個の体系が樹立された暁に、変遷が認承される。[11]

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、

この頃［小島注、天保年間］の武家言葉資料として、「夢醉独言」（天保十四年）がある。『夢醉独言総索引』によれば、アナタ系三例に対して、オマエサマが四例用いられている。ところが町人に多用されたオマエサンは出てこない。

と、述べている。

武家の用人源兵衛――武士勝小吉

お前さまはいろ〳〵とおばれなさり舛が、喧嘩はなさいましたことがあり舛か。是は胆がなくつてはできません（夢醉独言・十六歳）

右の用例では、「お前さま――おあばれなさります」が、段階Aの主述呼応の形式であり、小松寿雄氏によって武家のことばとされる〈お前さま〉が用いられている。これは、氏の主張のとおりである。ところが、

武家の用人源兵衛――武士小吉・新太郎・忠次郎

おまへさん方[12]は、けが〻有つてはわるいから、是非〳〵早くにげろ（同）

のように、小松寿雄氏によれば、「出てこない」はずの〈おまへさん〉の用例が見いだされるのである。この用例は、「おまへさん――にげろ」と、段階Aの主述呼応の形式でないとの理由から、氏によって、無視されたのかも知れない。この用例が、もしも、このような理由で、無視されたとすれば、

仕立屋――武士勝小吉

夫（それ）はあなた様はごむりだ（夢醉独言・二十一歳）

易者関川讃岐――武士勝小吉

あなたは大変だ、上れ（同・三十七歳）

に見られる、「あなた様――ごむりだ」・「あなた――上れ」の〈あなた様・あなた〉（アナタ系）も、同じ理由によって、無視されるべきである。〇〇〇三例に対して、△△△は四例用いられているという、度数の多少による〈論の進め方〉は、常に成功するとは限らない。段階A所属の対称代名詞群のなかで、〈あなた・お前さん〉は、町人・武家を問わず、全階級で、いちばん広く用いられていたと考えられる。かりに、〈あなた〉の有する敬意の度合が〈お前さん〉のそれよりも大であるとしても、なぜ大であるのか、どのくらい大であるのか、それらを証拠に基づいて論じることは、ためらわれる。後考に俟つ。

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、次のように、述べている。

オマエサマは、町人の言葉では用例が少ない。「浮世風呂」でも四例（うち一例は皮肉）しか、用例がない。「浮世風呂」ではアナタとともに遊ばせ言葉の例とされており、皮肉以外の三例は武士と思われる生酔[13]に向かって使われている。町人使用のオマエサマは、多く武家が聞き手である、遊ばせ言葉である、という二つの点でアナタと共通点を持っている。

○

町人は目上の聞き手を、武家であればアナタで、町人であればオマエサンで言い表す傾向があった。これはアナタの方がお屋敷言葉らしく、オマエサンより改まった感じがして、武家を待遇するのにふさわしかったからであろう。

右に見られる氏の見解は、『浮世風呂』に、〈あなた・おまへさま〉が、お屋敷ことば・遊ばせことばとして、捉えられていること、〈あなた・おまへさま〉が、町人のことばとして、使用されることがまれであり、その話し相手を多く武士階級とすることの二点に要約できる。

同一の話し手・話し相手の関係のもとで、町人が、武士に対して、〈おまへさん・おめへさん〉を、用いている例が見いだされる。

無頼・鬼十――武士出島佐藤太

へゝゝゝゝ幾斗左様被仰ツても恋路斗りやア威光だの御光だのといふ訳にやアいきやせん。兎角金銀の光りでなくツちやア御利益はありやせん。お前さんのお心次第でお俊を手に入る工夫は此鬼十が胸三寸に仕事がありやすが、此様な所ぢや込入な咄しもなりやすめへ（春秋二季種・第二段）

鬼十――出島佐藤太

ハテお前さんも気の短けへお士さまだ。諸事は此鬼十が呑込でゐりやア貧乏ゆるぎもさせやアしねへ。案ずと大船に乗た気でお出でなせへ。大蛇の鬼十と仇名の付たお兄イさんが取持ちだ。吾ちが見込で呑込みやアこつちの自由サ（同・第三段）

これらの用例は、無頼の男（話し手）が、武士（話し相手）に対し、その弱みをつかんで愚弄している。ゆえに、通常の町人のことばとしては、武士に対し、〈おまへさま〉を用いるのが、適切なことばづかいである、という考えかたが生じるかも知れない。

だが、その考えかたには、本稿の筆者は、賛成できない。その理由は、次のとおりである。

男伊達・門太――武士白藤源作

元はと言へばお前さんに、頼まれてから起つた事、弔金を二三十両、何卒貸してお呉んなせえ。全体其の場で知県所へ、訴へて検使でも願ふ筈だが、ねへモシ、旦那、然様しちやア一伍一什、吟味されるは知れたる事、お前さんも宜くあるめえと、内分で済せる積り。（恋の花染・第五回）

門太――富商福住屋の隠居
ヘイ、お前さまが福住の御隠居さま、初めてお目に懸りました。今源作さま被仰る通り、お前さまも御承知で。（同）

右の用例は、武士（話し相手）に対し、その弱みをつかんで愚弄していた男伊達（話し手）が、上層町人の隠居（話し相手）に対しては、〈お前さま〉を用いている。ゆえに、さきの無頼の男・鬼十も、話し相手により、事と次第によっては、〈おまへさま〉を用いたはずである。〈あなた・おまへさま〉は、武士階級のみならず、下層町人階級の人々によっても、敬語行動の〈場〉として、それが必要なら、用いられた、と考えられる。

左に示される用例群によれば、

武士の妻――夫片岡伝五右衛門
お前さんにお聞まうさずに取はからひましたから、後日でお叱り被成かと思ひながらも、（いろは文庫 第二十八回）
茶屋の女――武士森胡平太
然う被仰るのを無理にとは申しませんが、今に母人も帰ツて来ますし、夫に私やア少しお前さんにお聞き申したい事がございますから、永くとは申しませんから、最少しお在でなすつて下さいまし（同・第三十八回）

のように、後期江戸語〈おまへさん〉は、武士階級・町人階級の男女を問わず用いられ、話し相手により、話される事がらにより、〈おまへさん〉のほか、〈おまへさま・おめへさん・おめへさま〉と、形ならびにそこに喚起される感情を異にしながら、一範疇〈段階A〉としての位置を、後期江戸語敬語体系のなかに、保持していたことが分かる。

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、

［小島注、オマエサマは］語源からすれば、当然オマエサンと同類であるが、待遇表現として見るとき、むしろアナタに近い。アナタもオマエサマも武家の対称であって、それが町人にも使用されるとき、オマエサンより待遇価値が若干高く、改まった感じがより強くなり、武家を聞き手とすることが多くなる、といえよう。

と、述べている。

茶やの女房――国侍百百九十九・生貫木膜
あなた方、よう入らつしやいました
国侍――茶やの女房
ナアイナイ（戯場粋言幕の外・巻之上）
国侍――出入りのごふくややしき廻りの手代
何かいく
手代――国侍
こりやおまへさま、紋づくしでござりまする（同）

右の用例では、「あなた――いらつしやいます」・「おまへさま――でござりまする」と、〈段階A〉の主述呼応の形式であっ

て、武家を聞き手として、〈あなた・おまへさま〉が用いられる。これは、小松寿雄氏の主張のとおりである。ところが、

富商布袋屋娘お七[14]——ゑびす屋三郎左ヱ門

ごきげんよう

三郎左ヱ門——お七

ヘイ、あなたえも。ヘイ〳〵〳〵、チトほんに、お遊びニお出なさりましヨ。私どもの末子めも、藤間へ遣しますから、チトお慰に夜分踊らせませう（戯場粋言幕の外・巻之上）

茶やの男——芝居客

ヘイお肴を上ます。あなた方、お尿に入らつしやりませんか

芝居客——茶やの男

イヱまづ（同・巻之下）

幇間鼓八——富商衰微

あなたはモシ、衰微さんではごぜへませんか

衰微——鼓八

ホウ鼓八公か（浮世風呂・四編中）

男伊達・門太——富商福住屋の隠居

ヘイ、お前さまが福住の御隠居さま、初めてお目に懸りました。今源作さま被仰る通り、お前さまも御承知で。（恋の花染・第五回）

のように、後期江戸語〈あなた・お前さま〉は、〈段階A〉としての位置を後期江戸語敬語体系のなかに保持し、武家に限らず、下層の町人階級に至るまで、広く用いられていたことが分かる。

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、次のように、述べている。

アナタの方がオマエサンより待遇価値が高そうだということは、両者が入り交じって用いられている具体的な場面から、読みとれることもある。「梅児誉美」のお阿（もとやり手。今はお長の主人）は藤兵衛に、アナタのほかオメエサンを二例使う。最初、藤兵衛に声を掛けられ、まだ誰とも分からぬ時は、「ハイおめへさんは」とたずねるが、素姓がわかったとたん、「ほんにあなたは木場の旦那」となる。しかし、「心をすゑて」反撃に移るや、またまた「モシおめへさん」に逆戻り、次に大枚一両貰えば、「是じやアあなたへお気の毒」と再転する。アナタとオマ（メ）エサンの使い分けが、いつもいちいち説明できると言い切ることはむずかしいが、このような読み解きが可能なことも多い。

相手の素姓が分からない時には、〈おめへさん〉、相手に反抗する際には、〈おめへさん〉、相手の素姓が分かったら、〈あなた〉、心づけに一両を受け取ると、〈あなた〉となる、このような用例を示されると、人は、〈あなた〉の方が、〈おま（め）へさん〉よりも、敬意の度合が高そうだ、という考えに、賛成す

るかも知れない。「読みとれることもある。」・「説明できると言い切ることはむずかしい。」・「読み解きが可能なことも多い。」などと、抑制的な説明をされると、人は、いっそう、心がひかれるかも知れない。

だが、次のような用例が示されたとしたら、人は、どのように、考えるであろうか。

金貸し勘九郎――無頼・鬼十

夫は有がたうございます。早速御承知あつて大慶至極。ときにあなたへ改めて申しますが。全体斯でございます。粤のお娘子のお俊さんがお頼みで。此春金を十五両用立て呉ろと被仰るによつて。私も原来知合た中。人の困るは我こまるも同じ事と思ひよもや間違の有らうとは夢聊存ぜず月〻二両宛掛金の対談の処。七月余り一向無沙汰。そこで私も腹立まぎれに今の様に申しましたが。イヤモウお前さんにいはれて一言もござりませんが。お詫はお詫借た物は借た物と。今母人さんのお言葉もあれば。どうで是迄の滞金今月はまア待とした処が。丁度十二両済ずに居やす。夫を耳を揃へてどうぞ只た今返金させてお貰ひ申したうございます（春秋二季種・第一段）

金貸し勘九郎――無頼・鬼十

那中間部屋の気散なあなた様が（同）

まさか、「あなたへ改めて申しますが」の〈あなた〉に、相手の素姓が分かったからと考える人は、いないであろうし、「お前さんにいはれて一言もござりません」の〈おめへさん〉に、相手に反抗していると感じる人も、いないであろう。つまり、小松寿雄氏の拠った用例群（春色梅児誉美・第十五齣）の〈言語行動の場〉と右の用例群のそれとは、全く異質であると考えざるを得ない。

言語研究において、妥当な結論に達するためには、周到な配慮のもとに、質を異にする用例をも、広く集め、質を異にする諸現象を統括して説明し得る考え方に到達すべく、〈学問としてとりあげるべき事実〉と〈無視すべき偶然的な事実〉とを区別することが不可欠である。

小松寿雄氏は、前掲の論文のなかで、次のように、述べている。

化政期の「浮世風呂」のアナタを遊ばせ言葉として捉えていることである。三馬がアナタを遊ばせ言葉として捉えていることである。「浮世風呂」では、次のようにアナタが遊ばせ詞の代表的語彙の一つとして引例されている。以下、一人の下女の「お髪（ぐし）」という言葉を、もう一人の下女がとがめだてして述べる台詞である。

●「お髪だの、へつたくれのと、そんな遊ばせ詞は見ツとむねへ。ひらつたく髪と云なナ。おらアきつい嫌だア。奉公だから云ふ形になつて、おまへさま、お持仏さま、左様然者を云て居るけれど貧乏世帯を持つちやア入らねへ詞だ。せめて、湯へでも来た時は持前の詞をつかはねへぢやア気が竭らアナ……モウ〳〵〳〵内に

居ると、あなた、どう遊ばせ、斯遊ばせで、おそれぬかせるのう。（日本古典文学大系一六〇P）

右の引用で、遊ばせ詞として挙げられているものを抜き出せば、次のようになる。

おぐし、おまへさま、お持仏さま、左様然者、あなた、～遊ばせ

右の見解の骨子は、式亭三馬が、〈あなた・おまへさま〉を、遊ばせことば・お屋敷ことばとして、捉えていたこと、江戸後期の下層町人階級の人々は、遊ばせことば・お屋敷ことばを、みずからの貧窮な生活に、無縁であると感じていたこと、の二点にある。

下層町人階級の人々相互にとって、〈あなた・おまへさま〉は、無縁である。だが、その下層町人階級の人々も、話し相手によっては、事と次第によっては、〈あなた・おまへさま〉を用いていた。この事実は、さきに示した用例群（無頼鬼十・男伊達門太・幇間鼓八）によって、明らかである。ゆえに、「町人使用のオマエサマは、多く武家が聞き手である、遊ばせ言葉である、という二つの点でアナタと共通点を持っている。」・「これはアナタの方がお屋敷言葉らしく、オマエサンより改まった感じがして、武家を待遇するのにふさわしかったからであろう。」という小松寿雄氏の考えには、本稿の筆者は、賛意を表しがたい。しかも、氏の右の見解は、氏が同じ論文で述べた「アナタとオマエサン系の待遇価値がだいたい同程度であるということは、両者がしばしば同じ聞き手に対して用いられることに、よく現れている。」という氏の見解に、矛盾するのではなかろうか。

要するに、研究対象としての後期江戸語は、ひとつの言語共時態をなすと見なされ、そこに変遷（或るいは、交替）という観点は介在しないものと考えられる。既成の敬語体系が（部分的に）崩壊し、同じ観点に立つ別個の敬語体系が樹立された暁に、変遷が認承される。〈あなた・おまへさま〉は、武士階級のみならず、下層町人階級の人々によっても、敬語行動の〈場〉として、それが必要なら、用いられた、と考えられる。それらの語を、遊ばせことば・お屋敷ことばと見なさず、武家を話し相手とすることが多いと考えない方がよい。〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめへさま・おめさん〉は、その形ならびにそこに喚起される感情をそれぞれ異にしながら、ともに一範疇〈段階A〉としての位置を、後期江戸語敬語体系のなかに、保持していた。

四　結　論

後期江戸語〈あなた・おまへさん〉の敬意に差異と変遷（或るいは、交替）とが存するとする小松寿雄氏の見解に対し、本稿の筆者は、敬語体系の抽象性と〈敬語行動の場〉の個別性の視点から考究し、次の結論を得た。

①後期江戸語〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめへさま・おめさん（など）〉には、〈敬意の度合〉が同じである側面があり、それと同時に、〈敬意の度

合〉に差異を持つ側面がある。ふたつの側面の、前者は、後期江戸語敬語体系に占める一範疇〈段階A〉に位置づけられた〈敬意の内容〉であり、抽象性が高い。後者は、後期江戸語の対称代名詞群を〈その意味が相互に影響し、関連し合う関係〉として捉えた際の〈敬意の度合〉であり、そこに〈敬意の度合〉の個別性（喚起される〈感情〉の差異）が内包される。

②研究対象としての後期江戸語は、ひとつの言語共時態をなすと見なされ、そこに変遷（或るいは、交替）という観点は、介在しないものと考えられる。既成の敬語体系が（部分的に）崩壊し、同じ観点に立つ別個の敬語体系が樹立された暁に、変遷が認承される。

③〈あなた・おまへさま〉には、武士階級のみならず、下層町人階級の人々によっても、敬語行動の〈場〉として、それが必要なら、用いられた、と考えるべき用例群が見いだされる。それらの語を、人は、遊ばせことば・お屋敷ことばと見なさず、武家を話し相手とすることが多いと考えない方がよい。

④〈あなた・おまへさん・あなたさま・おまへさま・おめへさん・おめさま・おめさん〉は、その形ならびにそこに喚起される感情を異にしながら、ともに一範疇（段階A）としての位置を、後期江戸語敬語体系のなかに、保持していた。段階A所属の対称代名詞群のなかで、〈あなた・お前さん〉は、町人・武家を問わず、全階級で、いちばん広く用いられていたと考えられる。かりに、〈あなた〉の有する敬意の度合が〈お前さん〉のそれよりも大であるとしても、なぜ大であるのか、どのくらい大であるのか、それらを証拠に基づいて論じることは、ためらわれる。後考に俟つ。

【注】

(1) 小島俊夫「後期江戸語における対称代名詞と待遇表現」（『国語』第六巻第一号・一九五七9）同『後期江戸ことばの敬語体系』（一九七四）第二章

(2) 服部四郎「文法的意義と言っても、話し手の「意識」と呼ばれる内的世界――即ち「内的場面」――のみに関係するのではなく、外界すなわち外的場面にも関係がある。特に代名詞の意義や敬語の研究では、話し手と聞き手その他の外的場面との関係を考察する必要がある。」（『日本の記述言語学』第五章『国語学』第六四集・一九六六3）

(3) 『言語学通論』（一九四七）序編

(4) 後期江戸語敬語体系における〈あなた・おまへさん〉の敬意の内容については、山崎久之氏の論文「江戸の庶民語の待遇表現の体系（一）――三馬の作品を中心として――」（『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』第一六巻・一九六六）がある。これに対する小島俊夫の見解は、『後期江戸ことばの敬語体系』（一九七四）第二章第一節に示された。

(5) ここに、〈感情〉というのは、語の音韻論的音節の高低関係の相違によって、話し手・話し相手の気持に、快・不快・喜び・怒り・悲しみなどが反映されることであり、語に固有の内容が喚起される概念としての〈意味〉と区別される。ちなみに、オカシ（お貸し）のcの1は、おしとやか。同cの2は、通常。同cの3は、やや強い調子。同cの4は、いらだち。オカシ（お貸し）の〈意味〉は、〈貸せ〉という命令の概念に一定の敬意の内容が加わる。〈貸す〉の意義素への論及は、省略。

(6) 金田一春彦「日本語のアクセント」（『講座現代国語学Ⅱ』一九五七）

(7) 金田一春彦「日本の方言」一九六六11同『日本の方言』（一九七五）

に所収。

(8) 「具体的言語単位と抽象的言語単位」(『コトバ』一九四九12) 同『言語学の方法』(一九六〇) に所収。

(9) 小島俊夫『日本敬語史研究　後期中世以降』(一九九八) 第二章第一節

(10) 小林英夫訳『一般言語学講義』(改版一九七二) 第Ⅱ編第1章

(11) 小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』(一九七四) 第二章第三節

(12) 『夢酔独言』の〈かなの表記〉には、ひとつの特異性がある。「けいこを毎日〳〵したが、しまへには上手になつた。」(十六歳)・「勝負をめつたにはしなへから、」(十七歳) の「しまへには」・「しなへから」は、「シメエには」・「シネエから」の発音を示していると考えられる。ゆえに、「おまへさん」は、「オメエサン」の発音を示すものかも知れない。なお、「世間ではおまいは豪傑だといふから」(三十七歳) に、「おまい」(お前) と表記されていることから、「おまへさん」が「オマイサン」の発音を示すものとは考えられない。

(13) 小松寿雄氏が「武士と思われる生酔」と述べる根拠が示されるべきである。先人の論文がもしも存在するならば、それが示されるべきであり、氏は、それを、多分、ご存じであろう。

(14) お七が富商の娘であることは、作品のなかの注記「十七八のぼつとりしたる娘、宿さがりと見え、五十余の母親に、下女、でつちまじり四五人の桟敷」から、分かる。

敬語体系のもつ〈敬意の内容〉の抽象性、体系の一範疇内の各対称代名詞の帯びる〈敬意の度合〉の個別性にしぼって論じる動機が与えられたことに、感謝する。

(こじま　としお)